

結社誌を訪ねて 安田 青葉

よ続け」と祈りたくなるのである。

讃美歌の窓放ちあるダリアかな

鈴木しげを

「鶴」十月号

米寿まで窯変かさね蓼の花

宮坂 静生

「岳」十月号

「窯変」と聞いて思い浮かぶのは国宝の「曜変天目茶碗」ではないか。中国の南宋時代に立窯で焼かれた茶碗であり、焼き上げる過程で黒釉が変化して斑紋が生じるのが特色とされる。この曜変は「窯変」と表記され、陶磁器を焼く際の予期しない色の変化を指すという。この作品では、八十八歳になるまで作者自身の色が変化を重ねてきたということを詠まれているのだろう。これに取り合はせられた「蓼の花」が素朴で良いと思った。蓼の花は紅色又は白色の花をびっしりとつけて花穂を作る。そして葉はとうと、紅葉をして、変化して美しい色どりを放つのである。

米寿、おめでとうございます。

戦後よ続け峯雲沖に立つ限り

高野ムツオ

「小熊座」九月号

「戦後」とは日本で言うならば、太平洋戦争が終わってから今までの八十年を指しているのだろう。この戦後の状態がいつまでも続ければと詠まれている。先の大戦では軍人の死者が「百万人、一般人の死者が八十万」ともいわれている。この作品の「峯雲」にはこれらの無事の命の魂が込められて、立ち上がっているように私には感じられた。昨今の地球上にある戦争を思うと、「戦後

この作品は、構造上は一句一章でありながら、内容は「讃美歌」と「ダリア」の取り合わせとなつていて、おそらく教会の窓が開け放たれていて讃美歌が流れできているのだろう。その窓の下の庭には、色とりどりのダリアが咲いているのである。シンプルに聴覚と視覚の景を捉えて、心地良い豊かな世界が広がっていると思う。

秋の蛇風の湿りを引きて来し

山田 貴世

「波」十月号

「秋の蛇」は晩秋になると冬眠をするために穴に入る蛇のことである。秋のどちらかというと乾燥した爽やかな季節でありながらも、風に湿りを感じたという作者である。もしかしたら一雨来るだけに、「湿りを引きて」の措辞に臨場感がある。山田氏の皮膚感覺に大いに共感した。

切株を起こせし父祖の青田かな

田湯 岬

「道」十月号

田湯氏は北海道のお生まれである。もしかすると、父祖をさかのばれば、開拓のために入植をされた方が居られるのかも知れない。明治に入り、耕地や敷地にするために山野や荒地を切り開いたのである。その開拓は、大木を切り倒してできた「切株」を掘り起こすことから始まつたのだろう。今、眼前に広がつていて父祖の遺してくれた青田から、北海道の探し方に思いを馳せている大きな作品となつていて。

初秋のひかり放てり塩むすび

南 うみを

「風土」十月号

いかにも美味しそうなおむすびではないか。「初秋のひかり」とはまさに取れたての新米を焚き上げて作ったおむすびの輝きのことだろう。鮭や梅干しはもちろん、今どきは様々な具のおむすびが作られている。コンビニのおむすびの売り場には様々あつて感心してしまう。ただ、新米の旨さ輝きを味わうには、先ずは塩むすびだろう。南氏は、野菜作りをされていると聞いている。初秋の実りの喜びにあふれた作品と思う。

懸崖の全てが蓄満ち満ちて

小坪 健水

「初桜」秋号

菊花展に並べられた丹精込めて作られた懸崖菊であろう。雪崩れるように組まれた懸崖に花は無くて全てがまだ蕾であると、それも蕾が「満ち満ちて」と念を押すかのように詠まれている。このことで、これらの花が満開になつた時のこの懸崖菊を囲む人々の様子まで容易に見えて来るようである。景の切り取り方が鮮明であり、想像を膨らませてくれる作品となつていて。

万緑や胸を拳で叩く手話

大島 雄作

「青垣」十月号

「胸を拳で叩く手話」とはどのようなものなのかと調べてみた。すると、「大丈夫」や「元気」といった意味を表現する際に使われるという。そういえばよく見かける手話かも知れない。作者は、この手話を万緑の中で見かけたのか、使われたのか。いずれにしても、万緑と手話の取り合せが大胆で気持ちが良い。そう言えば、メジャーリーグの試合で、抑えのピッチャーやが最後のバッタ一を三振に取つた。その時、ピッチャーやが自分の胸を拳で叩いて

いる場面を見たが、手話もこのような感じだろうか。生命感にあふれた作品となつていて。

陽の雨よスキヤンダラスな青揚羽

鳥居真里子

「門」九月号

立ち止まらずにはいられない作品であった。上五の「陽の雨よ」の呼びかけるような措辞も印象的だが、何といつても中七の「スキヤンダラスな」という俳句にあまり使われないような措辞に作者の気迫を感じた。青揚羽にほどのようないいものがあるのか調べてみると、アオスジアゲハやオオルリアゲハなどが見られた。翅の青色瑠璃色が鮮やかで、高く敏捷に飛ぶことができるようである。陽の降りそそぐ中、この青揚羽が舞つていたら、「スキヤンダラスな」はぴたり当てはまる措辞と思う。鳥居氏の直感の効いた表現であろう。余談になるが、青色の揚羽蝶が示すメッセージとしては、「良縁を結ぶ」とあつた。スキヤンダルを引き起こさなければ良いが。

蜩の止みては鳴きて灯の点る

大橋 一弘

「雨月」十月号

蜩は、明け方や夕方にカナカナカナと優しい声で鳴く。この作品の場合は灯点し頃の夕刻であろう。鳴き止んだかと思うとまた鳴き出して、それを何度か繰り返したに違いない。そうして、うちに灯が点り始めたのである。この作品には淋しさを感じる。どこか淋しいのだけれど、灯の点る先には団欒があるのでないかとも思い温かい気持ちになつた。何の計らいもないところに成り立つ味わい深い作品と思われる。